

原告団

遺族・CO裁判、災害責任
追及、特集号
第百二十六号

無念の被災

CO患者—松本博さん。
生年月日—大正十四年八月十五日。現在五十四歳で、米年定年を迎える。

三川鉦入社は昭和二十二年一月二十九日、太平洋戦争が敗戦をもって終り、外地から引揚げてきた直後のこと。

仕事は、常一歩の坑内機械工。三池闘争終結直後の昭和三十一年十月二十三日、全職場の三池労働組合のうえに荒れ狂うフアンシヨの支配と対決するなか、妻の照子さんと結婚。照子さんは昭和七年九月二十五日生れたから、結婚したとき松本さんが三十六歳で、照子さんは二十九歳だった。いい合わしたように、余儀ない家庭の事情から婚期を取りはしめた二人だった。

すぐ懐胎したと見え、翌—三十七年七月十四日男の子誕生。松本さんは大介と名づける。

二人が結婚してから二年目、大介君が誕生してからやと二年をこそこたったばかりの昭和三十八年十一月九日、松本さんは、国鉄

原告団レポート

CO患者—
松本 博 さん



妻の照子さんに暖くささえられながら、CO患者—松本博さんは静かに日々を過ごしている。顔を覆う真っ白な包帯が痛々しい。

助かったが

鶴見駅と重なりながらぼつ発した三川鉦炭じん大爆発に被災してしまつた。その日地獄と化した三川鉦炭底を逃げまどううちに、一酸化炭素に侵されて中毒、俗にCO患者と呼ばれる身になり果てたのである。ようやく、かすかなしあわせの陽しさがさしはじめていた一家の運命は砕け散った。

大爆発の日、彼は災害発生後三時間ばかりして、自力で四山鉦から脱出した。彼は坑道のそこかしこに累々と横たわっていた、仲間たちの無残な死体を、直撃した一酸化炭素のためすっかり狂ってしまった、ま

何のゆえか、それでも襲ってくる頭痛

でけものように闇のなかを歩かばれまわったりする仲間の姿を目撃してはいない。そのためその頃自分まで、まさか一酸化炭素に侵されていることなど思ってもいなかった。

だから翌年一月三川鉦の生産が再開されると、ためらうことなく仕事に出かけていった。だが、長くは続かなかった。なぜなら、仕事どころかたて坑内にさがるばかりで、頭がガンガン痛んできた。得体の知れぬはげしい

頭痛だった。そればかりでなく、めまい、耳鳴り、ドウキ、息切れ、なまめ。とうとうぐらえ切れず、四月か五月に休むことになる。一酸化炭素中毒—彼がCO患者であることは、もうだれの目にもまぎれのないことだった。でも、災害責任のなかにあつた。でも、災害責任を一人でも軽くしておこうとたくらむ三井鉦山は、例によって公傷と認めようとはしなかつた。三井鉦山が経営する病院—七十、七十三十七人の患者仲間と十把ひとかけに労災補償を打ち

た煉炭火鉢で、あやうく火災をひき起こしかけたことさえある。「精神症状—軽い情意鈍麻。軽い易怒。軽い記憶障害。軽い思考困難。神経症状—手指振せん。発汗。錐体路、自律神経症状。身体症状—心臓。循環器」CO患者の診療を担当する金子医師の精神症状所見によれば「不活発。弛緩症。人格水準低下」とも指摘されているが、その彼も例にもれず、昭和四十一年十月末のこと、七百三十七人の患者仲間と十把ひとかけに労災補償を打ち

「ああ、もうこれで殺される、と思ったこともたびたびだもんねお父さん」 子供の頃住居をたずねたとき、ニヒリとつぶやいて笑顔を

の照子さんの暖い心にささえられながら、静養生活をおくっていた。松本さん本人にも、また照子さんにも、退院するとき主治医が、「悪いところはとってしまつたら、もう痛いところはないはず。これ以上は、頭の痛みの原因はわからない」といった言葉が今心に深くひっかかって離れない。なぜなら、それでもはげしい頭痛はやむことなく彼を苦しめているのだから。

輝け命の火

松本さんにはもう一人のこと、妻の照子さんにとつてまたひとりの息子の大介君（今は高校一年生）にとつて、この家によりやく射し始めていたしあわせといふもの陽さしは、ちらりとかすめたばかりで通り過ぎていってしまった。

CO中毒症に苦しむ夫とともに、これから明日の青春に向かつて力いっぱい羽ばたこうとする、ちびっ子大介君を育てている大介君を、照子さんは自らも高血圧症と闘いながら和裁などのアルバイトで懸命にささえている。今も消えることのない、夫と美しく生きていた日々の思い出。雲仙への新婚旅行先で嵐にあい、夫の暖い手に助けられながら過ぎた数日間。

もの忘れが

彼の場合も、ほかの患者仲間とまったく同じで、とうとうカルテなどはしたためようがない悲しいこと、苦しいことがまわりのもの忘れがひどい。たとえ何度話しても、どこに都合が悪いことなどの場合、えてして彼の口から飛び出す言葉は、「自分はそがんことば聞いとらん」だ。

「好きな庭木（じり）をさす、その用具をそのたびにきまつて病取り扱いに泣かねばならなかつた。組合の団結の力で、三井鉦山に「公傷」として認めさせることができたのは、かなり後になつてからのことであつた。

今も実際には、妻の照子さんに対しては熱いばかりの思いやりをまたひとり息子の大介君に対しては、それこそ目にいれても痛くないほどの慈愛を秘めている松本さんなのに、一酸化炭素という猛毒によって、中枢神経組織のこの細胞が侵されたものか、常人—いや身も心も固く結び合つて生きている妻にさえわからぬことがひきかねになり、ときに感情を爆発させる彼である。

狩猟の大好きな彼に連れられ、阿蘇の山々や有明海浜のそこかしこでキジやカモを求めて走り回つた、あのときのこと。

顔の左に深い傷跡 通り過ぎていったしあわせ

に、松本さんは余儀なくも、私傷病、取り扱いに泣かねばならなかつた。組合の団結の力で、三井鉦山に「公傷」として認めさせることができたのは、かなり後になつてからのことであつた。

職場へ復帰

彼の病状について、昭和四十四年の十二月に作成されたカルテに

いつか、部屋のなかに置き忘れ

「あ、こぼれたら」と

「あ、こぼれたら」と

「あ、こぼれたら」と